黒船の来航

〈解読文〉

図Ａ　亜墨利加水軍艦捻督
　　ペルリ省（肖）像

図Ｂ　亜墨利加軍艦
　　副将　アロタスン

図Ｃ　嘉永六丑六月一一（ママ）日渡来
　　同月十三日退帆
見物人は皆諸侯より遣はされし先手衆、
異人上陸四百人許り、軍列調練終り、
十六人楽人を出して礼楽す、而して後、
本使・副使及廿五将、帝王の印書を呈す、
浦賀奉行戸田伊豆守・井戸鉄太郎
両人、下曽根氏は大砲の師たり

〈読み下し文〉

図Ａ　アメリカ水軍艦捻督（そうとく）
　　ペルリ肖像（しょうぞう）

図Ｂ　アメリカ軍艦
　　副将　アロタスン

図Ｃ　嘉永（かえい）六丑六月二日渡来
　　同月十三日退帆（たいほ）
見物人はみな諸侯（しょこう）より遣（つか）わされし先手衆（さきてしゅう）、
異人（いじん）上陸四百人ばかり、軍列調練（ちょうれん）終わり、
十六人楽人（がくじん）を出して礼楽（れいらく）す、しかして後、
本使・副使及び二十五将、帝王（ていおう）の印書（いんしょ）を呈（てい）す、
浦賀奉行（うらがぶぎょう）戸田伊豆守（いずのかみ）・井戸（いど）鉄太郎
両人、下曽根（しもそね）氏は大砲の師（し）たり

〈用語の解説〉

・水軍艦捻督ペルリ…東インド艦隊司令長官ペリー提督。
・軍艦副将アロタスン…副官アダムス参謀長（さんぼうちょう）。
・六月二日…嘉永六（１８５３）年六月三日の誤り。

〈解説〉

「太平のねむけをさます上喜撰（蒸気船）たった四はい（杯）で夜もねられず」は、黒船の来航を詠んだ狂歌である。

嘉永６（１８５３）年６月３日、黒船４隻が突如浦賀沖に姿をあらわした。黒船は防水・防腐のコールタールを塗ったために黒く見える大型帆船のことで、唐船と区別するためにこう呼ばれていた。来航した蒸気船は２隻、艦隊司令長官ペリー提督が乗船するサスケハナ号とミシシッピ号で、あとの２隻は帆船軍艦である。似顔絵には「亜墨利加水軍艦捻督ペルリ」とある。

伊那郡上穂村（駒ケ根市）の大沼勝治は６月12日の日記に次のように記している。

江戸へ唐（ママ）船着之風聞、尤いゝ田（飯田）様・高遠様御家中方大勢、右ニ付御出府、江戸殊の外騒々敷風聞有之候（『大沼日記』）

黒船来航の情報が、この地にも伝えられていた。知らせを聞いた飯田・高遠藩の藩士が出府したとも記している。

当時の瓦版や錦絵には珍奇なペリーの肖像が描かれている。「色が白く鼻が高く鼻筋が額より通っていて、下は白目がちで瞳と眉が赤く、歯は細かくて牙がある。耳が大きくて髪の毛が薄く白髪が混じり渦を巻く」と記され、天狗に似せたものなど、さまざまな肖像が描かれた。模写したものと思われる。副官アダムス参謀長の肖像に描かれているのは肩章であろう。

絵図は６月９日、浦賀近くの久里浜にペリー一行が上陸したときの配置図である。海上には会津・忍藩、陸上では川越・彦根藩が警備にあたっていた。三千人が警護にあたったといわれ、そのほかに見物人も多数いた。

停泊中の黒船から艘14の小船に乗って「四百人ばかり」が上陸した。「十六人楽人を出して礼楽す」は、随行した少年鼓笛隊のことであり、このとき「ヤンキー・ドゥードゥル」を演奏したという。日本では「アルプス一万尺」で知られるメロディーである。

ペリー一行は幕が張られた接見会場で、フィルモア大統領の親書を手渡した。親書を受け取ったのが浦賀奉行の戸田伊豆守氏栄と井戸石見守弘道の両名である。「下曽根氏は大砲の師たり」は、浦賀奉行所砲術師範で当日屋外警備にあたっていた下曽根金三郎のことである。

幕府は開国を求める親書を受け取り、翌年の返答を約束して帰国させた。翌年１月、ペリーは再び浦賀に来航した。条約の締結を強硬にせまり、幕府はついに日米和親条約に調印した。

【参考文献】

・中田節子『江戸びとの情報活用術』教育出版
・笠原潔『黒船来航と音楽』〈歴史文化ライブラリー〉吉川弘文館
・小西四郎監修『図説・黒船の時代』河出書房新社
・岩下哲典『〈金海奇観〉と幕末日本』中央公論美術出版